

# 新刊案内 (著者割引)

## 歴史的大規模土砂災害地点を歩く そのII

著者：井上 公夫 (砂防フロンティア整備推進機構 専門研究員)



発行所:丸源書店

2019年8月20日発売

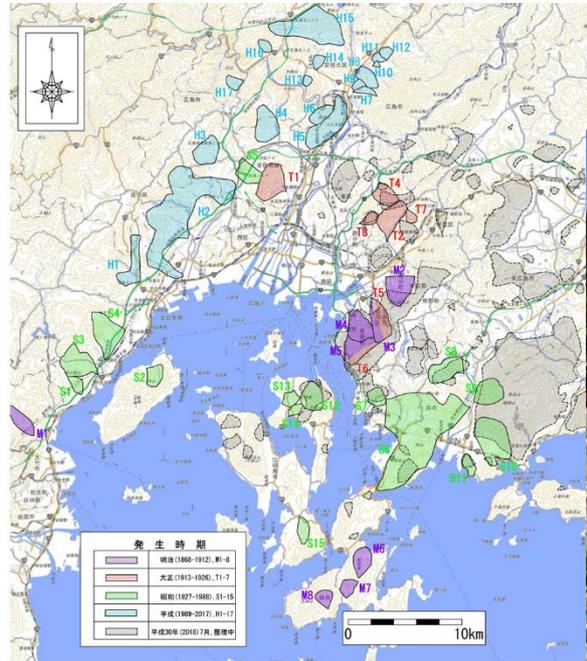
(B5判, **オールカラー**, 308p.)

定価: 6,000円 (+税)

**著者割引: 4800円 (+税)**

自然災害列島の砂防関係者、理学・工学、

全国市町村の防災関係者におすすめする



### 推薦の辞

本書(そのII)は、昨年6月に刊行された前書(I)に引き続き、井上公夫氏が36年間の日本工営株式会社、13年間の一般財団法人砂防フロンティア整備推進機構に在職中の期間を通して、調査・研究されてきたことをもとに書かれた「歴史的大規模土砂災害地点を歩く」というシリーズコラムの31~50回分をまとめたもので、発生日月と発生場所を特定できた事例が紹介されている。

本書の目的は、「過去の災害に学び・生かす」ことにある。このシリーズコラムは、関心のあるところから読み始めればよい。推薦者は広島に在住しているので、「コラム46, 47」を読んでみた。「コラム46」の図1(上図)に示されているように、広島湾岸地域は明治・大正・昭和・平成の150年間に繰り返し土砂災害が発生したことがわかる。

平成26年(2014)8月20日未明、広島市安佐南区から安佐北区にかけて局地的な豪雨により発生した数多くの土石流が多数の人家をおそい、甚大な被害が生じた。この地域には、天文元年(1532)春に、勇者香川勝雄が大蛇退治をしたという話が「コラム46」でつぎのように紹介されている。大蛇とはもちろん土石流のことであろう。

「香川勝雄がはねた大蛇の首は七八町(700~800m)南東に飛んで田の上におち、また西へ一町(100m)飛んで田の上におちた。勝雄が大蛇の首を刎ねた太刀は近くの光廣神社に奉納された(現在行方不明)。」現地に行くと土石流扇状地が連なった地域で、八木地区にある「蛇王池の碑」(右上写真、420年遠忌の昭和27年(1952)に建立)や「光廣神社」が現存する。この地区はかつて「蛇落地」と呼ばれていたが、現在は「上楽地」という地名に書きあらためられたという。戦後の広島市域の拡大にとともに、この地域はベッドタウンとして宅地開発が進み、多くの住宅が建設された。そして再び土石流に見舞われた。

平成26年(2014)の土砂災害の現地を歩くと、この伝承を行政当局や地元民が知っていたら、豪雨時に異なる対応がとれたのではなかろうかと思われる。

防災・砂防関係の調査・研究者だけでなく、市町村の防災関係者や一般の方々にも、本書を片手に歴史的大規模土砂災害地を訪ねてみることをおすすめしたい。

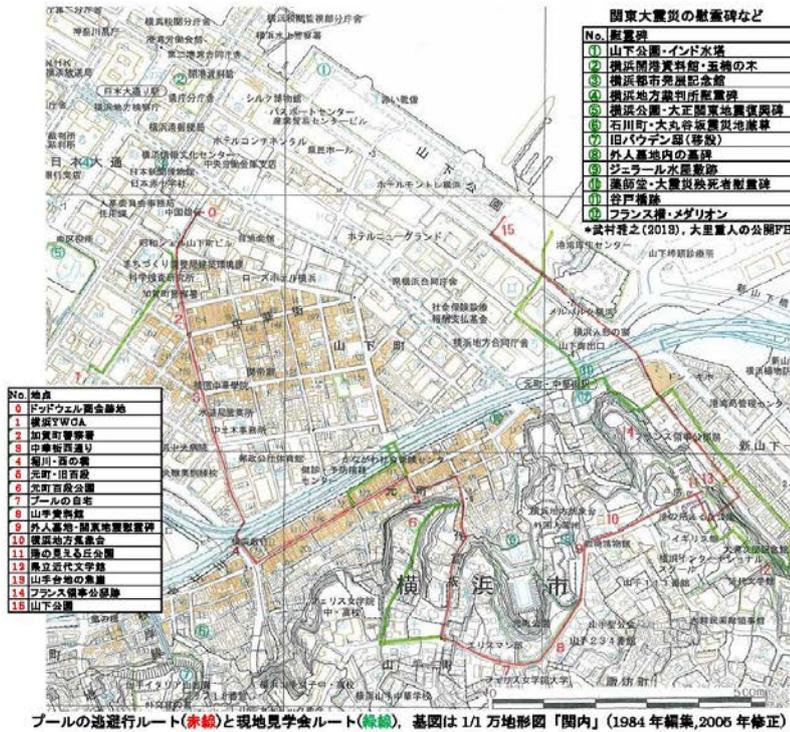
2019年7月

広島大学大学院総合科学研究科環境自然学講座 海堀 正博

# 歴史的大規模土砂災害地点を歩く

(そのII)

井上 公夫 著

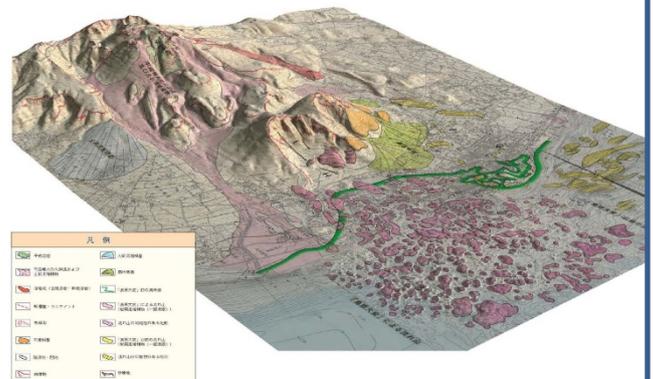


丸源書店

そのII 2019年8月刊

# 歴史的大規模土砂災害地点を歩く

井上 公夫



丸源書店

そのI 2018年6月刊

# 『歴史的大規模土砂災害地点を歩く』(そのⅡ)

## 目次

推薦の辞 海堀 正博	iii
はじめに	v
コラム 31 天正十三年(1586)の天正地震による土砂災害	1
コラム 32 明治24年(1891)の濃尾地震直撃による土砂災害	16
コラム 33 濃尾地震後の豪雨による土砂災害	29
コラム 34 富士川支流・大柳川における天然ダムの形成と災害対策	42
コラム 35 姫川左支・浦川の稗田山崩れ(1911)と天然ダムの形成・決壊	51
コラム 36 豪雨(1914)による安倍川中流・蕨野の河道閉塞と静岡市街地の水害	66
コラム 37 関東大震災(1923)による横浜の土砂災害—9月1日のプールの逃避行ルートを歩く—	76
コラム 38 関東大震災(1923)による神奈川県東部の土砂災害—横須賀地区と浦賀地区の土砂災害地点を歩く—	91
コラム 39 関東大震災(1923)による丹沢山地の土砂災害—秦野駅から震生湖周辺の土砂災害地点を歩く—	105
コラム 40 関東大震災(1923)による小田原市の土砂災害—根府川・白糸川流域の大規模土砂災害地点を歩く—	120
コラム 41 伊豆大島・元町の土砂災害史と「びやく」	134
コラム 42 東京都と山梨県の土砂災害を示す「びやく」	148
コラム 43 神奈川県・静岡県・千葉県を示す「びやく」	162
コラム 44 カスリーン台風(1947)による土砂災害地点を歩く	176
コラム 45 長野県西部地震(1984)による御岳崩れと土石流	188
コラム 46 広島市安佐南区・八木地区の災害伝説と大正15年(1926)災害	203
コラム 47 広島周辺の枕崎台風(1945)による土砂災害地点を歩く	216
コラム 48 大分県日田市大山町山際地すべり(1987)と災害関連対策	225
コラム 49 富士川右支小武川・ドンドコ沢の巨大深層崩壊と岩石なだれ(887)	237
コラム 50 1991年ピナツボ火山の巨大噴火後28年間の地形変化	259
【付録1】 「いさぼうネット」コラムの作成とアクセス状況	285
【付録2】 編集作業を行った冊子、論文・報文など	290
【付録3】 自然災害などを題材とした小説の著者・書名	295
あとがき—謝辞にかえて—	298
索引	299

## 『歴史的大規模土砂災害地点を歩く』(そのⅠ, 既刊)

### I部 日本の歴史的大規模土砂災害

### II部 歴史的大規模土砂災害地点を歩く

コラム 1 寺田寅彦『天災は忘れられたる頃来る』	コラム 15 1502年の姫川流域・真那板山の崩壊と天然ダム
コラム 2 河道閉塞による湛水(天然ダム)の表現の変遷	コラム 16 1714年の信州小谷地震による姫川・岩戸山の天然ダム
コラム 3 八ヶ岳大月川岩屑なだれによる天然ダムの形成(887)と303日後決壊	コラム 17 豪雨(1757)による梓川上流・トバタ崩れと天然ダム
コラム 4 寛文二年(1662)の近江・若狭地震と町居崩れ	コラム 18 天明三年(1783)の浅間山天明噴火と鎌原土石なだれ
コラム 5 イタリア・パイオントダム(1963)の被災地を訪ねて	コラム 19 天明三年(1783)の浅間山天明噴火と天明泥流
コラム 6 1707年富士山宝永噴火～長期間に及ぶ土砂災害～	コラム 20 善光寺地震(1847)による土砂災害
コラム 7 1792年の島原大変肥後迷惑	コラム 21 善光寺地震(1847)による犀川の岩倉山天然ダム
コラム 8 高田地震(1751)による日本海側の無数の大規模土砂災害	コラム 22 飛越地震(1858)による土砂災害
コラム 9 高田地震(1751)による名立崩れと追立山の巨大地すべり	コラム 23 飛越地震時の鷹崩れと天然ダム決壊洪水
コラム 10 日光・大谷川流域の地形特性と土砂移動特性	コラム 24 天保五年(1834)の富士山の大規模雪代災害
コラム 11 寛文二年(1662)の日光大災害	コラム 25 石打の大規模地すべり(1176)と松之山町湯本地すべり
コラム 12 1707年の宝永地震による仁淀川中流・舞ヶ鼻の天然ダム	コラム 26 安政東海・南海地震(1854)による土砂災害
コラム 13 1707年の宝永地震と半年後の豪雨による高知県東洋町の巨大地すべり	コラム 27 周防大島で発生した1886年の激甚な土砂災害
コラム 14 1707年の宝永地震と富士川・下部湯之奥の天然ダム	コラム 28 明治22年(1889)紀伊半島豪雨による土砂災害
	コラム 29 明治25年(1892)に四国東部で発生した高磯山と保勢の天然ダム
	コラム 30 寛政西津軽地震(1793)による追良瀬川上流の天然ダム

## コラム 65 群馬県北東部尾瀬沼南西部の巨大地すべり地形の紹介



図1 防災科学技術研究所：立体地すべり地形分布図「燧ヶ岳」「藤原」図幅



図2 尾瀬沼東南部の巨大地すべりの赤色立体図  
国土交通省利根川水系砂防事務所提供

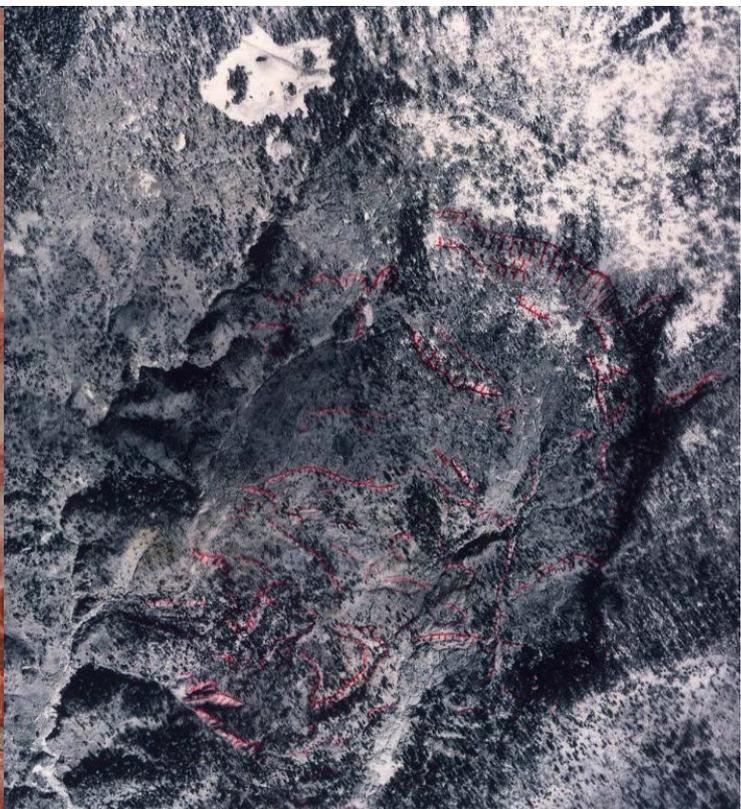


図3 空中写真(林野庁 1963年10月13日撮影)  
山-232 (ダイニオクアイズ), C-29-10

コラム 65 は、いさぼうネットの「歴史的な大規模土砂災害地点を歩く」の最終コラムとして本年末に公開する予定です。

群馬県北東部尾瀬沼南東部の巨大地すべり地の調査を日本工営の新入社員時代の 2 年間 (7～11 月) 担当しました。現地調査を終了して、東京に帰る途中の昭和 46 年 (1971) 11 月 11 日 15 時頃、車中のラジオで「川崎ローム斜面崩壊実験事故」のニュースを聞きました。

この崩壊実験では報道関係者を含め 15 名が死亡しました。取り纏め役だった大石道夫地表変動防災研究室長 (防災科学技術センター) も重傷を負われました。東京都立大学理学部地理学科の学生時代に当時東銀座にあった防災センターの大石室長の下で、地形判読関係のアルバイトをしていました。崩壊実験の場所の川崎市生田緑地の現場には、弾性波探査の手伝いで現場によく行きました。日本工営に入社せず、大学院に進学していたら、当日確実に実験現場にいたと思います。

群馬県沼田林業事務所の復旧治山事業の調査業務で、この巨大地すべり地の調査を 2 年間続けたことは、私にとって思い出深い現場であり、貴重な財産となっています (2019 年 7 月 27 日～29 日に 47 年ぶりに現地調査を 6 人で行いました)。その当時は大清水から沼山峠に抜ける国道建設で地元はもめていました。尾瀬沼・長蔵小屋の平野長靖氏は、初代環境庁の大石武一長官に直訴状を書き、大石長官の視察後、国道建設は凍結されました (平野, 1972)。平野氏は昭和 46 年 12 月に尾瀬沼から東京に向かって下山する途中、大清水の手前の一ノ瀬付近でビバーク中に凍死されました。

図 1 は、防災科学技術研究所の立体地すべり地形分布図「燧ヶ岳」「藤原」図幅で、図の北部に尾瀬ヶ原、尾瀬沼が存在します。赤丸の範囲が調査対象の巨大地すべり地です。大きさは尾瀬沼とほぼ同じで、南北 1.2km、東西 1.0km あり、頭部滑落崖は落差 80～100m で半円形に続いています (大八木, 1974)。図 1 をみると、この地域周辺には調査地域と同様の巨大地すべり地が多く存在することがわかります。

図 2 は、尾瀬沼東南部の巨大地すべり地周辺の赤色立体図 (国土交通省利根川水系砂防事務所提供) です。図 3 は、巨大地すべり地周辺の空中写真 (林野庁 1963 年 10 月 13 日撮影, 山-232 (ダイニオクアイズ), C-29-10) で、井上が判読した地すべり滑落崖を赤線で示してあります。地すべり地の東側を奥只見からの送電線が通っていますが、送電線鉄塔の中には地すべり変動で水平に数 m 移動しているものもあります。地すべり地の南側は地すべり変動が活発で、群馬県によって復旧治山事業が行われました。

#### 引用・参考文献：

大八木規夫 (1974) : 尾瀬沼南東の大規模地すべり地形, 講座Ⅲ 空中写真で見る地すべり地形, 地すべり技術, 10 号, 口絵, p.47-49.

群馬県利根沼田県民局・利根環境林務事務所 (2006) : 平成 7 年度復旧治山事業 (調査委託) にごり沢地区報告書

群馬県林務部 (1971) : 昭和 46 年度復旧治山事業 (戸倉地区地すべり調査) 報告書

群馬県林務部治山造林課・沼田林業事務所 (1973) : 昭和 47 年度復旧治山事業戸倉 (ニゴリ沢) 地区地すべり調査報告書

平野長靖 (1972) : 尾瀬に死す, 新潮社, 274p.